

アニマル

530 大阪市北区中之島2-3-18 新朝日ビル7F ☎06(201)8425 ●配布についてのお問い合わせは ☎06(

1万匹収容もらい手40匹

動物福祉協会
救護センター

「ほら、もう大丈夫のようね。ようやく信用してくれたのね」。フェニカ・三代子さんが金網越しに指を差し出すと、その母犬は初めてペロ・ペロとなった。生まれて間もない子犬5匹と一緒に捨てられていた。ここに来て10日になる。連れてこられた当初は、全然なつかず、警戒し、かみついてきた。

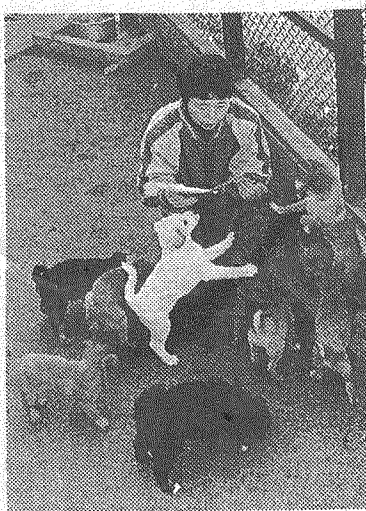
西宮市・北山町の日本動物福祉協会救護センターは、捨てられたペットたちでいつも満員だ。ガリガリの体を震わせておびえている、鳴いているばかりで食べない——など「人間不信」の状態でもつて来る犬やネコも多い。

三代子さんと夫のウルスさんが世話をしている。犬・ネコを中心に、飼われている動物は常に四匹に上る。土曜日が休みだが、「忙しくて休めないですね」とウルスさん。

センターの広さは約千平方

メートル。裏が山になっていて、周りに人家は少なく、鳴き声が迷惑をかけることもなさそうだ。犬の一家は、全部で36。金網で仕切られた一つのケージの大きさは約10平方メートルあり、奥には屋根つきの「寢室」がある。そこに一匹から数匹の犬が放し飼いされている。別棟には治療室もある。訪ねた日はケガと方ぜ

のネコが入っていた。いま、建物増し工事をしており、完成するまでは、種ばかりではない。シベリアン



子犬たちにエサをやる三代子さん

西宮市北山町の救護センターで

ハスキーやエアデールテリアなど、いまの「ペット・ブーム」のなかで人気といわれる「血統書付き」もかなりの数になる。救護センターにやってくる1万匹のうち、もらい手がつくのは30匹から40匹にすぎない(注)。残りはやむなく安楽死

させている。近くに住む獣医の手で麻酔がされたあと注射で、という方法がとられる。

この「安楽死」が様々な波紋を呼ぶ。8年前、「動物福祉、実は薬殺」などと報道されたこともある。「いまも捨てられた動物の収容にいくと、おーい犬とり、あとで殺さんだろ」と子どもから時々言われる。悲しいね」とウルスさん。

この救護センターによく出入りする同協会阪神支部の松田早苗さん(53)は、「安楽死はたしかに一番いい方法ではないでしょう。しかし、野良で生きのび

たとしても、飢えや交通事故・

虐殺が待っている可能性が強いのです」。

飼った以上は家族として犬を全うするまでつきあうべきだ。そうして、どうしても飼えなくなった時には、安楽死させるのが飼い主としてせめてもの責任だと言う。

こうした考えに「動物の幸せを人が決めるのは勝手」という批判があるが、「犬・ネコは人間でも野性でもない中途半端な存在です。ペットにした人間が最後まで責任をもつべきだ」と答える。

救護センターの三代子さんは「ここで行っていることは本当の福祉とは言えないでしょう。飼い主のあと始末をしているのですから。しかし、もし明日から捨てて人が一人もいなくなれば、ここにいる動物は全部大往生を全うさせてやれるのです」。

(注) 救護センターで犬やネコをもらうには次の条件があ